

なぜ東アジアなのか、 そのアイデンティティーを如何に 構築するのか

——東アジアの歴史と文化についての再思考——

The East Asian Community: What is necessary to turn a monumental scheme into reality and is it really possible?

葛 兆光
Ge Zhaoguang
復旦大学教授



(李 恩民 訳)

問題提起：東アジア諸国のアイデンティティーの共通の基礎とは何か

本日、皆様にご報告するのは、東アジア諸国の文化的アイデンティティーに関する問題である。私は歴史学者なので、話題を東アジア史における文化的アイデンティティーの問題に重点を置く。

数年前、経済学者、政治学者、文化学者、そして歴史学者は、こぞって「東アジア」という話題に熱中していた。まるで東アジアが、経済的一体化によって政治的にも欧米と対抗でき、文化的には独立した文化システムを持ち、民族国家を超えて歴史的にも存在しなかった「東アジア」を構築できたかのようなようであった。まるで「東アジア」は、あたかも「ヨーロッパ」のような、ひとつの共同体が出来上がったかのようなようであった。

しかし、近年周知のように、中韓・日韓・中日の間に領土問題をめぐり論争が熾烈に展開されている。例えば、「中国東北」か「高句麗」か、「独島」か「竹島」か、「釣魚島」か「尖閣諸島」かの問題、東シナ海以外にもまた北方四島の問題と南シナ海の

島々の問題がある。同時にロシアや北朝鮮の問題も巻き込まれ、領土問題にとどまらず、イデオロギーの相違、さらに軍事的対抗関係の展開などの問題もある。各国のナショナリズムが高揚し、かつての「東アジア共同体」の構想はますます非現実的で、遠ざかっていくようである。これは私がすでに数年前に指摘した、共同認識或いは東アジアの文化的アイデンティティーを構築しない限り、「東アジア共同体」は容易に成り立つものではないという主張を実証している。

なぜならば、私は歴史学者として東アジアにおける文化的アイデンティティーの歴史的な変遷に着目してきたからである。率直に言えば、東アジアの文化的アイデンティティーと相互信頼は、早くも17世紀の半ば頃からすでに存在していない。まして19世紀末から20世紀初頭にかけての衝突、1930～40年代の戦争、1950年代～80年代の冷戦時代はなおさらである。文化的な疎遠さがますます拡大し、イデオロギー的摩擦も平行線のままで、政治制度の落差も極めて大きい。東アジア域内における相互の緊張と偏見は、「東洋」と「西洋」間の開きよ

りも激しい。経済的なつながりはまだ存在しているが、政治的な信頼関係はすでに消えてしまっている。こうした状況のもとで、果たして文化的アイデンティティの構築はできるのだろうか。

おそらく「東アジア」の一体化を推進するにあたって、政治家が貢献すべき事柄は多いかもしれないが、私は歴史学者として、歴史と文化を再検討する必要があると思っている。

1 比較：東アジア各国の文化的アイデンティティについて

比較文化の研究で、我々は習慣的に「東洋」と「西洋」、あるいは「東方」と「西方」の比較を行っている。実は中国で「西方」という文化を比較の対象として取り上げたのは極めて遅かった。20世紀までに、確かに中国の文化交流と文化比較の対象になっていたのは、中国の近隣である日本、朝鮮、ベトナム、モンゴル、インドなどで、とりわけ東シナ海と南シナ海地域に位置する朝鮮、日本、ベトナムであった。しかし、古くから今日まで、中国は東アジア各国文化の相違を、中国の「自己認識」の「鏡」として見倣しておらず、さらにこれらの相違ある文化を、共通のアイデンティティを構築すべき「区域」としても見ていない。

私は、中国の学者として、これに関して中国学界の不十分なところを自己批判しなければならない。自己認識について言えば、私は、今の中国を単に「近代的西洋」というひとつの物差し、ひとつの鏡、同じ視覚から物事を見てはいけないと思う。中国の学者は、なぜ意識的に周辺の国々の文化や立場から中国を見つめないのだろうかと思ふべきではない。その要因には「天朝大国」の伝統意識と「中国中心主義」的な考え方があるからかもしれない。また我々は、過去の文化的な共通性がすでに消失していることを認識すべきであるが、そういう認識は持っていない。現在我々は、歴史の共同認識と文化的アイデンティティを構築しなければならない。

なぜかという、それは東アジア域内各国の文化が互いに異なり、差異も大きいからである。東アジア各国の文化の比較研究を行うと、東アジア文化は多様性があると同時に共通性も見出せるだろう。しかしながら、なぜ我々はいつも「同文同種」「一衣帯水」「漢字文化圏」「儒教文化」という共通点だけを強調し、逆に日本、中国、朝鮮間の文化的相違に着目しないのだろうか。

その原因を、私は以下のように思っている。つまり、かつて中国人に不必要な歴史的傲慢が確かにあったほか、東アジアにはかつて漢唐代に生まれた一つの文化を共有する伝統があり、相互依頼と相互信頼の時代が確かにあったことが一因であるかもしれない。「東アジア」の区域協力を提唱するため、我々はいつも思わず遠い昔の時代を議論し、我々が同様な文化と利益を共有していたことを想起する。しかし、私が特に指摘したいのは、17世紀半ばから21世紀に至るまでの間、漢唐文化を基礎とした東アジア諸国文化的共同体が既に弱体化し、ひいては崩壊したこと、かつて存在していた文化的アイデンティティや相互尊重の伝統がすでに過去のものとなったことである。また、現実において東アジア各国の間に軽蔑と誤解が溢れ、ひいては双方間に反発や偏見も充満している。

これはどうしてか。もしも、この疑問を解くことができるのなら、我々は東アジア各国間の共同認識とアイデンティティを見いだすことができるかもしれない。

2 中国、朝鮮と日本：17世紀以降相手の文化に対する見方

原因は、歴史の中に見つけることができる。

百年余り前、岡倉天心は『東洋の理想』の中で、自信に満ちて「アジアはひとつ」と言った。これは「ヨーロッパ」に対抗して言ったことである。しかし、アジアは本当に一つなのだろうか。文化的相違の大きな南アジア、中央アジアと西アジアは別と

して、我々が昔から共通の文化を有したと考えている「東アジア」でさえも、問題があるようである。古代において、かつて「漢字文化圏」が存在していたかもしれない。西島定生が指摘したように漢唐時代の「東アジア」では、律令制国家、仏教信仰、儒教思想、漢字の使用等の共通性があった。しかし、「蒙古襲来」に深く刻み込まれた記憶とともに、豊臣秀吉以後の日本は次第に中国と異なった道を歩み始めた。日本は伝統的な中国文化を尊重しつつ、現実の中国文化をますます軽蔑するようになった。「華夷変態^{かいへんたい}」という言い方は、日本人の見方として偉大なる漢唐時代の中国がすでに滅び去ったことを意味する。特に明治維新以後、日本が奮起し、後進的な中国に対して、以前に存在した好感度が完全に消し飛んだ。

朝鮮はどうであったのであろうか。満州族の清政府が山海関内に入って全中国を統治した後、朝鮮は満州族政権に対して偏見を抱き、「清朝中国」への蔑視^{みん}と朝鮮の「小中華意識」を生み出した。彼らは「明以後は中国がない」と思っていた。言うまでもなく、近世の東アジア諸国はすでにそれぞれ異なる道を歩み出したが、大清帝国だけが未だに自らの「天朝の夢」を抱いていた。実は当時の東アジア諸国の観念や文化のなかに、漢唐時代にあった中国への求心力がすでになくなり、今日に至ってもその状況は続いている。

東アジアの三カ国が「近代化」のプロセスの中で、それぞれ異なる道を歩み、異なる政治傾向を選択したことによって、それぞれの政治的同盟と文化的アイデンティティーが醸成され、その相違は特に顕著になった。更に、日清戦争と二回の世界大戦を経て、歴史的に暫時形成された隔たりが、三カ国間の相違をいっそう深めさせた。従って、人々が期待していた新しい「東アジア」共同体の形成は、恐らくほど遠いのである。

そうでなければ、なぜ今日においてもまだ靖国神社、釣魚島（尖閣諸島）、東シナ海石油・ガス田、台湾、高句麗、竹島（独島）、歴史教科書など、い

ろいろな問題があるのだろうか。『アジア史概説』を著した宮崎市定さえ、文化的意味上の「アジア」があるか否かについて疑問を投げかけている。

3 議論:東アジア文化的アイデンティティーを構築する基礎は何か?

東アジアは一つの特異な文化区域である。(一) この区域にかつて漢唐文化の伝統を共有したことがある故に関係が深い。中国は自らが中央大国と文化の発祥地であることを想像し記憶している。朝鮮と日本は、文化的には中国から離れられないものの、懸命に離脱しようとする心理状態にある。(二) 日本と中国の近代化の過程とその結果は、各自の文化と伝統の深みと正反対になっていた。かつて「学生」であった日本は、今や先進国となり、かつて「先生」であった中国は、逆に今は比較的遅れて、双方の心理状態は入れ替わってしまった。21世紀に入って、中国は長い間の遅れから急速に発展し、バランスが覆って生じた双方の心理は、かなり錯綜している。(三) 現在、資本主義と社会主義といった政治体制の相違、植民地・半植民地を経験した側と侵略を行った側の相違、経済発展程度の相違、それにアメリカと北朝鮮の要素も加わることによって、相互の警戒心を高め心理的溝を一層深めた。

従って、我々は真の東アジア文化的アイデンティティーの構築、東アジアの政治的相互信頼、経済上の相互補完という共同体を切望しているのであるが、地理的に近いことは文化的アイデンティティーの基礎ではなく、政治上の相互信頼の前提でもない。交通・通信などがますます便利になったグローバルの時代において、地理的近接性が、必ずしも経済相互補完の不可欠な要素ではない。

多くの人は、東アジア共同体の構築を政治、経済、文化上においてワンパッケージで解決すべきだと希望している。かつて中日間の多くの人は「政冷^{せいれい}経熱^{けいねつ}」現象などに注意を払っていた。しかし、これは片思いの現象であり、理性的な分析に欠ける思考

である。事実上、ますます相互依頼が必要な時代において、経済の一体化は容易に形成できるが、逆に政治上の相互信頼は、政治的イデオロギーが異なる場合に達成し難い。文化的アイデンティティが形成される時こそ、「共同性」が初めて成り立つのである。重要なのは、文化的アイデンティティの形成に、歴史上の文化的融合と分離を探求せねばならないことである。故に、如何に歴史を反省し、如何に東アジア文化的アイデンティティが崩壊した歴史を考察し、如何に文化的アイデンティティの構築の必要性を再確認するかによって、「なぜ東アジアなのか、どうすればそのアイデンティティの構築ができるのか」ということを議論しなければならない。これは非常に重要なことである。

4 急^せいで事は仕損ずる：東アジアの文化的アイデンティティをどのように構築するのか？

周知のように、共通の共同体、或いは共通性のある空間を構築するには、文化的アイデンティティの基礎は欠かせない。文化的アイデンティティ構築の要素は三つある。(一)我々は、かつて一つの共通の歴史的源泉を共有したことがあること、或いは一つの共通の文化伝統を享受したことがある、ということを知ることである。例えば、各国は漢唐文化の中の儒教、律令、漢字と仏教の文化を各自持っていたこと。(二)我々は、現在「他者」(例えば欧米人)とは違う人間であることを認める。我々が彼らと違うところは、人種の違いだけではなく、文化上の違いであるということが重要なのである。例えば、我々はみんな儒教や仏教を信じ、「国」と「家」を貫く倫理を重視し、陰陽五行の観念を有していたことなど。(三)我々は、将来的に必ず共通の道を歩くと信じる。この道においては、我々は協力して難関を切り抜け、ヨーロッパのように「アジア・コミュニティ」或いは「アジア共同体」を構築することができる。——ここで述べているのは過

去・現在・未来へと向き合うことである。¹⁾

しかし、一歴史研究者として、私はここで繰り返す述べなければいけないのは、東アジア共同体を構築するために、まず文化的アイデンティティの構築が必要であるが、そのためには歴史を回顧しなければならないことである。しかしながら、歴史を遡って議論するとき、昔の「恩と仇」「是と非」は、議論を攪乱する恐れがある。私は各国間の文化融合と分離の歴史を検討する時に、思わず孫文の「革命なお未だ成功せず、同志よって須く努力すべし」という言葉を思い出す。今はまさにこういう精神が必要だと感じている。私は決してアジア共同体の構想と構築に反対しておらず、みんなが一緒に守るべきアジアの価値観があるべきだとも思っている。しかし、現状から見れば、「東アジア共同体」或いは「アジア的価値観」を提唱するための道のりは遙かに遠いのである。

2012年11月23日韓国にて改訂

注記

- 1) 故に、歴史を反省し、東アジア文化的アイデンティティの崩壊史を考察し、その文化的アイデンティティの再構築の必要性を明確にすることは、非常に重要なことである。付言すると、政治的アイデンティティと文化的アイデンティティの区別はあるのか、或いは両者を区別できるかについて、我々は議論すべきである。一般論として、政治的アイデンティティとは、ある「国家」に対する忠誠と服従を尽くすことで、自ら「国家」の利益を最優先に位置づけることである。

この種のアイデンティティの構築に向けての障害はいつも「政府」と「制度」である。従って、その政治的アイデンティティの構築を超えて、より一層文化的アイデンティティの構築を重要視することは重要である。なぜならば、文化的アイデンティティとは、ある歴史・文化・伝統への敬意を払うこと、その価値観・風習慣行・精神特質を理解して賞賛すること、さらに自分がその中の一員だと自覚することである。

このような文化的アイデンティティは、国境を越え、エスニシティと政治を超え、異なる民族を繋げる「きずな」となっている。これは、まさに我々が、現在積極的にその構築を促しているものである。しかし、この文化的アイデンティティ構築の前提条件は、歴史に対する共同認識を有することである。